

女性史とオーラルヒストリー

Women's History and Oral History

折井美耶子

1 はじめに

ご紹介頂きました折井でございます。私は女性史とオーラルヒストリーということで、話をさせていただきます。女性史は歴史学の分野に入りますが、歴史学のなかでも疎外されている感じがありますので、こういう学際的な場で報告させて頂くのを大変嬉しく思っております。私の紹介には、地域女性史と書いてあります。地域女性史が中心になりますが、女性史全体も視野に入れて報告させていただきたいと思います。

ポール・トンプソン氏の『記憶から歴史へ』という著作のなかに、女性史について言葉をさいているところがあります。女性史のなかでオーラルヒストリーを用いることは、「先祖の女性たちの沈黙を破ることであり、女性の尊厳を再主張することだ」ということが書いてありまして、共感いたしました。女性たちは、歴史の中でずっと排除され続けてきたわけですから、そういう女性たちの声を聞くのは、まさに今日のテーマの「消えゆく声を聞く」とか「見えないものを見る」ということの重要な部分ではないかと、私は思っております。

2 女性史研究と聞き書き

最初に、簡単に女性史研究と聞き書きについて振り返ってみたいと思っております。日本の女性史研究は戦前もありましたが、確かな流れになっていくのは第二次世界大戦後のことです。1950年代に歴史学研究的なかで、いわゆる国民的歴史学運動という動きがございまして、民衆の中に入って行って民衆と共に歴史を作るということが唱えられたことがありました。ちょうどそのころ私は学生でしたから、私の歴史研究の原点にはそのような考え方があるかと思っております。その運動のなかで、女性に関しては「母の歴史」を書こうという動きがございました。その「母の歴史」について、井手文子さんが「母の歴史は、あらゆる矛盾の結節点にいるような民衆女性の姿、それを描くことが大事だ」ということを書いていらっしゃいます。鶴見和子さんもかなり積極的に関わっていらっしゃいまして、『母の歴史』という本が出版されています。これはまさに見えないものを見えるようにする歴史の一つだったのではないかと思います。この運動は長くは続かなかったのですが、こういうことが女性史の底流にあったと思います。

そして60年代の後半から70年代にかけて、「民衆史」といわれる歴史が盛んに書かれた時期に、女性史の分野では、当時「底辺女性史」といわれましたが、山本茂美さんの製糸女工を描いた『あゝ野麦峠』や森崎和江さんの『まっくら』、これは炭坑で働いた女性たちです、それから山崎朋子さんの海外に出嫁ぎに行った娼婦の『サンダカン八番娼館』、そして村上信彦さんの『明治女性史』、全4巻で大部のものですが、これも民衆女性を中心に据えて、かなり聞き書きの手法

を使っています。こういう本が続いて出されました。

一方で、戦前からの女性解放運動をしてきた女性たちの聞き書きをすることもかなり行われまして、山代巴さん、牧瀬菊枝さん、隅谷茂子さんたちが中心になっていらしたわけですが、『丹野セツ』とか『聞書ひたむぎの女たち』などが出ました。ちょっと後になります、渡辺悦次さんと鈴木裕子さんが共同で『運動にかけた女たち』や『たたかいに生きて』といった本を出されています。それ以外には、戦争体験記は50年代から始まりまして、この時期女性たちが語ったのは主として被害体験だったわけですが、手記も含めると無数といっていいほど書かれていたのではないかと思います。

それから70年代の後半ころから、これは1975年の国際女性年という女性の地位向上をめざす国際的な動きのなかで、地域女性史が活発化していくわけです。各地にかなり自主的な地域女性史研究会ができてくるわけです。聞き書きというかたちで、自分たちのお母さんとかお祖母さんの話を、それは特別な人ではなくごくあたりまえの女性たちの話を書き残しておこうということで、いろんな地域で本が出されます。例えば北海道女性史研究会はかなり古いのですが、開拓に関わった女性たちやアイヌの女性たちの聞き書きをしているわけです。『小作争議のなかの女たち』という蜂須賀農場争議のことを聞き書きした本はかなり早い時期のもので、新潟県には、新潟女性史クラブがありまして、『竈のうた』というまさに竈の前にいたお母さんたちの話を聞き書きしている本が出されています。

そのあと、地方自治体のなかで女性政策の一環として地域の女性史を編纂することが位置づけられるようになりまして、地方自治体の主催による女性史編纂が活発に行われるようになります。その最初で画期的な内容だったのが、神奈川県『夜明けの航跡』で、これは1987年に出ています。ここでは約80人の女性たちから聞き書きをしています。以来各地で地域女性史の編纂が行われておりまして、そのなかで聞き書きは重要な位置を占めております。ただし、21世紀に入ってからいわゆる女性問題に対するバックラッシュといわれる流れが始まりまして、かつては活発であった地方自治体の女性史編纂事業が影をひそめだしている状態にあるのではないかと思います。

しかし、自主的な地域女性史研究グループはまだ健在で、これからも引き続いて研究をして行こう、聞き書きもして行こうという意気込みにあるわけで、今年の9月に第9回全国女性史研究交流のつどいが新潟で行われる予定になっております。これは全国組織があって開かれる大会ではなく、任意で自分たちが会を開くと立候補して行われてきた会で、第1回は1977年名古屋で開かれました。その後、旭川、神奈川、愛媛と続きまして今年が第9回になりますが、全国から手弁当で集まった女性たちが、聞き書きも含めて学習や研究の交流をいたします。今年の新潟では、オーラルヒストリーが一つのワークショップになっております。

3 聞き書きそしてオーラルヒストリーと私

ところでこういう流れのなかで、私自身はどうかということですが、私の聞き書き体験の最初

は『歴史評論』での連載で、戦前からの女性運動家たちにインタビューすることでした。戦前からかなり著名な、山川菊栄、市川房枝、丸岡秀子、帯刀貞代などですが、私にとっても面白い仕事でした。その後、私個人の研究である富本一枝の評伝に関わって神近市子、堺真柄そのほか有名無名の沢山の方々から話を聞きました。ほとんどの方がすでに亡くなられてしまったわけで、今はもう二度と聞けない、そういう声を残しておけてよかったと思っております。市川房枝さんは当時現役の国会議員でしたから非常にお忙しくて、秘書の方から2時間ですよと厳命されていたのですが、ご本人が興にのって4時間以上も続けてお話をくださったというような体験もございました。これがきっかけで、帯刀さんは自伝をまとめてくださいましたし、市川さんは戦前編の自伝はすでにお出しになっていたのですが、戦後の婦人参政権が実現するときの裏話などもお話をきかせて、非常に印象的でした。

その次に私は地域女性史の編纂に関わってきたわけですが、これは普通の歴史研究とはかなり違う体験でした。私が関わったところで正式に出版されたのは、川崎市、東京の新宿区、世田谷区、江東区の4箇所です。それ以外に冊子のような形でまとめられたのは、調布とか三鷹などですが、それぞれ100人くらいの規模の聞き取りをしています。トンプソン氏の本の中に「人々は歴史を書くことが出来る」というフレーズがありますが、この地域女性史の編纂も専門家だけがやるのではなくて公募の市民委員が参加するわけです。専門家も市民も一緒になって聞き書きを集めたり資料を集めたり、そして時にはその聞き書きや資料をもとに通史を書いていくことを市民がやる場合もあります。ただ通史を書く場合は一定の訓練が必要ですから、ある程度の時間的なゆとりがないとできませんが、新宿などではそれをいたしました。聞き書きについては、このトンプソン氏の本がもっと前に出ていればよかったと思いました。実際に聞き書きをするのにその手引きになるような本もなく、自己流で模索しながらやってきたわけですが、この本を読んで、あゝあまり違っていなかったという思いが今しています。

地域女性史の編纂には、文字資料が少ないわけです。その地域の公文書館とか歴史資料館、歴史博物館などに資料を調べに行くんですが、だいたい「女性に関する資料なんてほとんどないよ」といわれるんです。でも何かあるのではと粘ると「まあ適当にそこらへんを探してみたら」といわれて、廃棄になりそうに積んであるダンボールをガサガサ探すと、私たちにとっては大切な衛生関係の資料などがでてきたりするんです。でも基本的に文字資料は少ないし、ごく普通に生きてきた人たちの普通の暮らしなどは記録されてこなかったわけですから、当然聞き書きを使うことになってきます。対象はその地域に住んでいる極めて普通の女性たちというのが大部分です。日常生活、誕生してから亡くなるまでの日々、どんな子ども時代を過ごしたか、どんな教育を受けて仕事は何をしていたか、どのように結婚し子どもを産み子育てをしたか、それからもちろん戦争体験も当然入ってくるわけですね。仕事、労働は非常に幅が広いのですが、例えば農業ですと地域によって稲作もありますし、畑作もありますし、それから養蚕ですね。この三多摩地域は養蚕が盛んでしたが今はほとんどなくなっていますから、この聞き書きは面白いし貴重だと思います。お蚕さん、お蚕様っていわれるくらい大事な収入源ですから、お蚕さんが座敷中

を占めて家族はみんな隅っこで小さく丸くなって寝ていたなんてことは、今ではもうほとんどわからないのではないのでしょうか。それからお産婆さんの話は、どこで聞いても誰に聞いても感動的です。それはやはり命と真正面から向き合っている、そういう仕事だったからではないかと思います。今では私たちの住んでいる地域にお産婆さんという仕事をやっていらっしゃる方はいなくなってしまったんですね。高度経済成長のなかで60年代になると、出産が自宅から病院出産に切り替わって行くのです。そのころから地域の中で信頼されていたお産婆さんが、私たちの周りから見えなくなっちゃうんです。もっとも今はまた家族と協力しての出産とか自宅出産を選択する人も少しづつ出てきましたけれど。

そういう特別な肩書きのない普通の方にお話を聞かせてくださいというと、「私なんて普通に暮らしていたんだから、何にも話をするようなことはないですよ」といわれるんです。でもそのお話を聞いているなかで、その人の人生が歴史の大切な一コマだということが、とてもよく見えてくるわけです。で、本人も改めて自分の人生を「あゝそうだったのか」と再確認するということがあるわけです。聞き書きは、語り手と聞き手との共同作業だということを痛感しております。そしてそういう作業のなかから、お互いが自分たちも歴史の担い手であるという共通認識を持つことが出来るようになって行くんですね。最初は「ちょっと面白そう」と参加してきた市民委員も、こういう歴史認識を持つ聞き手や書き手になっていくというのは、とても素晴らしいことであり、市民参加の地域女性史編纂は一種の社会教育、成人教育だとも私は思っています。

話を聞いて初めて分かるということもあります。例えば世田谷の聞き書き集『里から町へ100人が語るせたがや女性史』のなかに、長男、つまり家の跡取と結婚した女性の話がありますが、結婚式のあと隣近所にお嫁さんをご披露してまわるわけですね。そのご披露のとき「今度うちで留守居をもらいましたのでよろしく」って紹介するんだそうです。その話を聞いたとき私たちはとてもびっくりして「なんで女は留守番なのよ」なんて憤慨したんです。ところがよく聞いてみると、こういって紹介してもらえるのは長男の嫁だけだったんですね。次男の嫁は必ずしも舅・姑と一緒に住まないということもありますけれども、そういう紹介はしてもらえない。なんだ留守番か、ではなくて、留守を預けることのできる人っていう紹介なんです。つまり次にこの家の主婦になる人だという重みがある言葉だと、次男の嫁になった人からいわれました。こういうことはただ書いたものなどではわからないですね。この世田谷の本は評判が良くて、NHKの海外向けのラジオでも放送されましたが、とくに南米地域からすごく反響がありました。世田谷は今では住宅地になっていますが、かつては農村地帯で、農村から関東大震災をきっかけに住宅地に変わる地域です。それで近郊農村の普通の暮らしが色濃く出ているものですから、とても懐かしいという面白い反響をいただいたわけです。

それから、聞き書きをやっているなかで、それを文字化して、表現していくときに、私は「聞き書き言葉」という、これは私の造語ですが、そんな新しい表現が必要ではないかと思っているのです。話し言葉でもない、書き言葉でもない、話されたことをまったくその通りに書いたら読

んでも分からないので、そこに読んで分かる「聞き書き言葉」という表現をつくりだすことが大事なのではないかと思います。トンプソン氏の本の中にも「新たな書き言葉」という表現がありましたので、同じようなことなのかと思ったわけです。

地域女性史をやっております、普通の暮らしを記録することも大切ですが、もうひとつ忘れてはならない大きなテーマは、売買春に関する問題です。自治体史のなかでは遊廓の存在はほとんど触れられていないんです。ですから女性史ではきちんと扱わなくてはいけないのですが、これは当事者からなかなか聞き書きの証言が得られないのです。業者だった方、周辺でいろいろな商売に携わっていた方たちからはなんとか話が聞けるんですが、当事者からはとても難しい。しかしぜひ聞いて書き残しておかなければならないことだと私は思っています。

私は今まで「聞き書き」という言葉で私の体験などをお話してきました。オーラルヒストリーという言葉は知っておりましたが、それが自分の中ではなかなか定着していなかったわけです。1987年に『歴史学研究』がオーラルヒストリーの特集をやったことがありますし、のちにこの本多勝一さん、澤地久枝さんの業績が本になっております。でもその後順調に歴史学研究のなかでオーラルヒストリーが位置づけられてきたかという、なかなかそうではなかったのではないかと思います。

その後、「従軍慰安婦」の問題がクローズアップされてきたときに、その証言の信憑性ということができます。「慰安婦」の存在はかつての兵士たちの間では公然と語られてきたのですが、公式記録がないからそれはなかった、あるいは政府・軍とは関係なかったとされてきたわけです。しかしその問題が金学順（キム・ハクスン）さんが名乗り出たことで、いわゆる見えないものとされてきたものが見えるものにされたわけですね。声を奪われていた金さんが、なぜ名乗りをあげたのか。家族に迷惑をかけるので沈黙しつづけてきた金さんが、もう家族もみんな亡くなってしまったし、今自分が話をしとかなければそれは消えてしまうと、奪われていた声を取り戻して、発言したということですね。それでようやく見えるものになってきたのですけれど、依然としてその証言の信憑性が云々されたのです。しかしその後、この発言をきっかけに他の方の証言もでる、またそれを裏付ける資料も発掘されたということがありました。

こうして歴史学研究のなかでも、オーラルヒストリーが一定の地歩を占めてきているのですが、私自身としては、酒井順子さんが私たちの総合女性史研究会の例会でイギリスのオーラルヒストリーについて報告して下さったことがありまして、そのとき初めて自分の中でオーラルヒストリーという言葉が定着したような気がします。定着したというのも変ですが、自分がずっとやってきた聞き書きも含めて、納得したというわけです。そしてアーカイヴの問題、地域女性史全体の資料保存もそうですが、とくに聞き書きの資料、テープの保存の問題などが切実な課題となっておりますので、ぜひその状況を知りたいとイギリスに参りました。大英図書館、帝国戦争博物館、トンプソン氏のいらっしゃるエセックス大学も訪問させていただきました。

4 現在の課題

現在の課題としては、オーラルヒストリー、聞き書きも含めて女性史や地域女性史をやってきたことで、従来の歴史学に転換を迫ることが出来たか、ということです。かつて上野千鶴子さんに「女性史は“つけた史”であって、まだ“書きなお史”になっていない」と批判されたことがあります。確かにまだ歴史学の分野で女性史の地位は低いですし、無視されることも多いのです。まして聞き書きなどはあてにならない、つまらない証言のように取り扱われることが多いのです。しかし私たち自身も素朴な聞き書きからさらにその方法論を鍛えていく必要があるのではと思っています。そんなこともありまして、今年の1月オーラル・ヒストリー総合研究会というグループを仲間たちと発足いたしました。

次の課題は、資料保存の問題です。参考資料としてお手元にありますのは、1998年神奈川県江ノ島にあります女性センターで開かれた第7回女性史研究交流のつどいの地域女性史分科会で提案し、全体会で承認された「女性史資料の保存・公開についてのアピール」です。これは全国の自治体に送付いたしましたが、ほとんど反応がないんです。全国にたくさんある地域女性史研究会が集めた資料、また自治体編纂の女性史に関する資料、わけても聞き書きのテープは非常にたくさんあるのではと思いますが、リストもありませんし数もつかめておりません。私と2～3人の仲間が今、全国の地域女性史の文献リストを調査しておりまして、それがほしい数百冊くらいあるんです。その半分以上に聞き書きが使われているとして、誠に大雑把な計算ですが1万人ぐらいの聞き書きがあるんじゃないか、あくまでも推測ですが。これらがどういう状況にあるのかほとんどわかりませんし、散逸してしまっているのではと、私は危機感を持っています。先ほどトンプソン氏もいわれたように、資料は一回使ってそれで終わりということではなくて、本人にとっても再研究が必要であって、それから公開することによって他の人がその資料を使うことも出きるわけです。だから保存し公開することが大事なんです。自治体で地域女性史を編纂したら、そこの女性センターなどに大事な資料ですから保存してくださいとリストを作っておいてくることが多いのですが、そのときの担当の方は資料の重要姓を認識していますから、はいお預かりしますというんですが、行政では2～3年で担当者が替わりますので、次に来た方は「これは何？ 汚いわね、早く片付けましょう」ということで廃棄してしまうことがあるのです。現に私がやりました川崎市の場合、中小企業婦人会館というところを拠点として編纂事業をいたしました。終わったあとそのなかにある女性の資料室に保存をお願いしましたが、その後神奈川県的女性センターで神奈川県関係を全部まとめて保存してもいいということで、調べましたら「ああ、あれはもう捨てちゃいました」といとも簡単に片付けられて、私たちは非常に驚いてしまったのです。で、そのアーカイヴというか、資料保存の問題が大きな課題ではないかと思っています。

さいごにコピーライトの問題です。今までかなりいいかげんに取り扱ってきましたので、あちこちの事例も学んで、これからはきちんとしていかなくてはと思っています。

おわりに

最後に、女性史でオーラルヒストリーをすることは、まさに消えてゆく声を聞いて、見えないものが見えるようにするというところに真骨頂があると思いますけれど、それによって、歴史学そのものを変えていく段階にはまだ届いていない、私たちの力が足りないと思っています。こうした地道な聞き書きや研究が積み重なって、いずれ従来の歴史を変えていくことができるのではないか、というところに望みをつないでやっております。

司会 ありがとうございます。女性史研究と聞き書きの回顧、それから折井先生御自身の広範な聞き書きと女性史編纂の体験、それから現在の問題について、大変豊富なご経験

を背景に話していただきました。

それでは次に進ませていただきます。次は、保莉実先生にお願いいたします。よろしくお願ひします。